



連載Ⅱ
当財団専門委員
わたしの1冊
第2回

『Hosts and Guests — The Anthropology of Tourism』 Second Edition

Valene L. Smith Editor

University of Pennsylvania Press, Philadelphia 1989年(初版は1977年)

本書は、1977年の初版『ホスト&ゲスト—ツーリズムの人類学的考察』の第二版として出版されたもので、今や世界の「地域のために観光を考える研究者」たちのバイブルとなった。初版も話題を呼んだが、第二版の価値は、掲載された世界各地の事例研究のすべてが、初版から15年間の追跡調査の成果となっている点にある。

人類学者はそれまで、おもに近代化が地域にもたらす文化変容を研究課題としてきたため、彼らにすれば、お構いなしにやって来て土足で地域文化を踏みこむ（かに見える）「ツーリズム」は、忌み嫌うべき存在であった。しかし、「ツーリズムは、ほとんどの社会において文化を変容させる主要因ではなく、低開発地域が近代化を図る上で導入した産業の最も合理的な選択肢に過ぎなかった」ということを、この15年間に及ぶ11事例の追跡調査が証明した。ツーリズムこそ人類学者が目を逸らさずに研究対象とすべき現象である、ということ突きつけたのである。

私がこの本に出会ったとき、日本はまさにバブル景気の下、総合保養地域整備法（リゾート法）を錦の御旗に、ゴルフ、スキー、マリナーなどの不動産と建設資本がらみの

画一的な地域開発に邁進し、これこそが観光開発と誰もが信じている最中であって、本書が指摘する文化的交流としてのツーリズムの本質などには誰も興味がなかった。

そうしたなか、第14章エピソードの「近代のツーリズムは、人々が文化の境界を越えるという世界史の中で唯一最大の平和的行為である」という言葉に触れ、日本人がまだ気づいていないツーリズム研究に取り組みたいと強く感じたのを憶えている。

当時の京都大学建築学科の三村浩史研究室でこの本を翻訳出版することになった。人類学の専門用語も分からない建築の人間だけで悪戦苦闘しやっと出版にこぎ着けた『観光・リゾート開発の人類学—ホスト&ゲスト論—の少し外した翻訳は、後に日本（1991）の少し外した翻訳は、後に日本の人類学の専門家たちから、先を越された悔しさを込めた？ 批判を受けることとなる。しかしあの時代に翻訳を世に問うたことを自負している。

今読んでも新鮮で示唆に富むこの本を、『Hosts and Guests』で育った人類学者の専門家たちと、いつか一緒に翻訳し、改訂版を出版したいものである。

（にしやま のりあき）



西山徳明（にしやま のりあき）

1961年、福岡市生まれ。京都で学んだ後、九州芸術工科大学、九州大学で18年間、西日本中心に町並みや集落の景観保存、文化遺産マネジメントを研究、2010年に北海道大学に移ってからは、日本各地の観光まちづくりや開発途上国（エチオピア、ヨルダン、フィジー、ペルーなど）でのJICAの観光開発国際協力に奮闘中。